

新聞記事から「時代の風」を聴く

— 1994～2003年 —

永野俊雄

生活福祉学科非常勤講師

はじめに

世の中には常に色々な風が吹いている。南の風、北の風、強い風、弱い風、温かい風、冷たい風…。しかも、その風は常に変わる。時代によって変わる。これを筆者は「時代の風」と呼んでいる。

以前、筆者がある地域の生涯学習センターで、生涯学習専門員として、市民に対して「講座づくり」の指導・助言をしていた時、講座づくりの手法として「時代の風」を取り入れることを提案しつづけた。講座の中には、どの時代にも変わらぬ性格のものと、時代によって常に変化して行く性格のものがある。後者に属する講座を開発するには、その時代に「人々はどのような事柄に関心を持っているのか」を、常にアンテナを高く張って探しつづけねばならない。

そこで筆者は、新聞（主として朝日新聞・日本経済新聞）に掲載された「文化」の動きを、文化全般、文学・出版、こころ、音楽、映画・映像メディア、美術・建築、演劇、消費生活、余暇生活、NPO・ボランティアなどのジャンルごとに分類して、主だった記事をスクラップし、さらに抜粋して、それぞれの記事の見出しを1年間ごとに表にまとめた。これらの文化面を中心にした「時代の風」の10年間分の表が揃ったところで、10年間の「時代の風」を概観することによって、「何かが見えてくるのでは」との興味に基づいてまとめて見ることにした。いわば、一種の「文化マーケティング」である。

本稿では、新聞記事の見出しを斜体文字で表現した。扱うジャンルが多岐にわたるため、筆者の知識ではカバーしきれず、「時代の風」のテーマに偏りが出たり、誤った解釈をしている個所があったら、お許し頂きたい。

I 1994～2003年の10年間はどうな時代であったか

この10年間は、①20世紀末から21世紀初頭にまたがる時期であり、②バブル経済が崩壊して、いわゆる「失われた10年」と呼ばれる時期である。現代の日本人がかつて経験したことのない、

変化の激しい時代である。

この10年間、わが国はバブル経済の反動で、長期的な景気低迷の期間であった。実質経済成長率は-1.2%~3.9% (うち2%以下が5年)、名目成長率は、-2.4%~2.8% (うち1%以下が6年) という状況であった。景気の長期的低迷は企業経営を圧迫し、雇用環境も大幅に悪化した。完全失業率は1998年以降4.2%~5.5%と高い水準が続き、有効求人倍率も0.49倍~0.72倍と厳しい求職環境が続いた。

一方、わが国の人口の動向は、少子・高齢社会が本格化し、急速な勢いで人口減少社会に突入し始めた。高齢化率(全人口に占める65歳以上の割合)は年々増加して2003年には19.0%となり、合計特殊出生率(一人の女性が一生涯に平均何人の子どもを産むかを示す数字)は1.32にまで減少した。

この10年間に、大きな事件や事故が相次いだ。1995年には阪神淡路大震災、地下鉄サリン事件が発生した。1997年には神戸小学6年少年殺害事件(酒鬼薔薇事件)が発生、金融業界では金融システム不安が一気に拡大し、国民を不安に陥れた。1998年には和歌山毒物カレー事件が発生、1999年には、企業における大規模なリストラが始まり、「リストラ元年」と呼ばれている。その影響もあってか、自殺者は年間3万3千人に達した。また、公立小中学校では校内暴力が多発し年間3万件を超えた。

2000年には世田谷弁護士一家殺害事件が発生、2001年には大阪教育大付属小学校で8人の児童が刺殺された。また、狂牛病問題が発生し、食生活に不安を投げかけた。海外では、アメリカで同時多発テロが発生した。

2002年には牛肉偽装事件が発覚し、病院においては医療ミスが多発した。小中学校では不登校に歯止めがかからず、家庭内ではDV(ドメスティック・バイオレンス)が多発し相談件数が急増した。2003年には、BSE感染、新型肺炎SARSが発生、また、過労死が過去最多を記録した。

このような大事件、大事故が相次いだ10年間に、その時代、時代を新聞はどのように表現したか。「第2の敗戦」、「『信頼の崩壊』-深い不安」、「あいまいな時代」、「怪しげな時代」、「停滞」、「寂しさ」、「暗鬱」、「終末感覚」、「縮み」、「疲労と停滞が覆う時代」、「長すぎる『透明な停滞の時代』」、「健全な諦観」、「個の時代」、「混乱」などのキーワードが紙面に踊った。

II 「時代の風」を聴く

上記のような時代状況を背景にして、この10年間にどのような「時代の風」が吹いたのか。前述のジャンルを超えて、私なりの「時代の風」分析をして見たい。色々な意味で、この10年間は、大きな転換期に差し掛かっているように思われる。

1. 不平等社会の到来

1970年の総理府「国民生活に関する世論調査」で、自分が「中」と答える割合が全体の9割

を超えたという結果が発表され、わが国は「一億総中流社会」というイメージが定着した。

しかし、1990年代半ば頃から、「中流社会の崩壊」、「格差の拡大」が叫ばれるようになり、「勝ち組」「負け組」という、二極化を強調する言葉が遣われるようになった。

新聞の見出しには、『『中流』の崩壊』、「中流神話は崩壊したか」、「『階層社会』に危機感、擁護論」、「揺らぐ中流—変わる仕事観」、「中流意識よさようなら」、「しばむ『自立した個人』」、「不平等はらみ揺らぐ自己責任社会」などの記事が見られる。

経済界では、不況にもめげず成長を続ける優良企業と、倒産の危機に追い込まれた多くの企業の二極化が顕著であった。サラリーマンの世界では、成果主義人事が拡大し、賃金その他の処遇面で格差が大きく拡大した。その結果、多くの社員のモラルは低下して、この制度は必ずしも成果が上がったとはいえない。これらの現象は家計面にも大きく影響を与え、生活水準の格差も拡大した。フリーターの増加やニート (NEET) の増大は今後の格差拡大の不安要因になっている。

2. 拡大指向文明の行き詰まり

第2次世界大戦後、わが国は成長・拡大路線を邁進してきた。グローバリズムの波も加わり、「より前へ、より速く、より大きく、より多く、より高く、より遠く、より強く」が国民の合言葉であった。その結果、生活は便利になり、経済的な豊かさも獲得した。その反面、環境は破壊され、競争社会の中で人々の心はすさみ、犯罪は増加し、成長・拡大指向の限界を、身をもって感じ始めた。

スローライフ

高速度の航空機、高速度の列車、高速自動車道、正確な運行時間、高速通信、企業における生産性向上、効率性の追求など、「速度」と「正確性」を追い求めてひた走ってきた結果、人々の心は疲労困憊した。成長の限界を感じ出した人々の間に、「時間」に対する関心が高まり、ライフスタイルや人生観に変化が現れてきた。

そこで出現したのが、今までの「ファーストライフ」に対するアンチテーゼとして「スローライフ」という生き方である。元来、環境問題に関して叫ばれていた“slow is beautiful”という概念が拡大して、生き方や生活の仕方にまで広がってきた。具体的には、環境問題に対する関心にとどまらず、自然回帰、田舎暮らし、癒し、健康に対する関心、地域社会に対する関心など、幅広い領域にわたる。さらに、マクドナルドに代表される「ファーストフード」に対して、「スローフード」に対する関心も高まった。スローフードはイタリアで始まり、長い年月と地域の風土や文化に培われた伝統的な食材や料理や飲み物を守り、食を楽しむことを目標とする。“slow is beautiful”の食生活版といえる。

新聞記事には、「速度礼讃から時の成熟へ」、「速度の文化—変化に追い付けぬ人間」、「拡大志向の文明転換」、「時間の見方変える時」、「『時間論』ブーム」、「『時間から空間の時代』への転換期」、「世紀末に高まる時間への関心 (記憶・忘却・思い出・ノスタルジア)」、「スローライフ

礼讃」、「スローライフ『何となく不安』(エコノミー症候群)」、「シンプルライフ提案」、「縮み礼讃、盆栽に潜む永遠」、「息苦しさの質—のんびり暮らし、穏やかに死にたい」、「未来を見通す時間の距離」、「暮らしに旧暦、スローライフ」、「スローフード、食問い直す」、「贅沢貧乏」などの見出しが目立つ。

エコロジー

1997年12月に京都で開催された地球温暖化防止京都会議において、気候変動枠組み条約の議定書(京都議定書)が採択された。また、2000年5月には社会の営みを資源循環という視点でとらえ、廃棄物の減量や再資源化を優先する基本姿勢を示す「循環型社会形成推進基本法」が成立し、2000年を「循環型社会元年」と呼んでいる。

環境問題は多方面で関心が持たれ、文学や美術の分野で環境問題が取り上げられ、旅行分野でエコツーリズムが盛んになった。新聞記事には、「循環型社会元年」、「環境文学、日米シンポジウム」、「『文学と環境』創刊」、「環境大学院、社会人が増加」、「環境大学開放—埼玉県」、「環境問題入門講座—環境事業団」、「環境学習、都と企業が連携」、「『破壊なき文明』の時代に」、「『アースデイ』にカフェやアート展」、「環境考える熱帯林、エコツーリズム」、「充実体験、エコツーリズム」、「エコ・ツアー推進(環境省)」などの見出しがある。

自然志向・健康志向

スローライフを志向する生き方の中に、自然志向、健康志向がある。都会の生活に疲れた人々の関心は自然に向かっている。森林に対する関心、田舎暮らしに憧れ、それを実行に移すケースが増えている。この10年間には鳥インフルエンザや狂牛病問題が発生し、「食の安全」に不安を投げかけた。農薬や化学肥料を使わず、有機的に栽培された食品を意味する「オーガニック食品(有機食品)」に対する関心が高まった。「オーガニック」というキーワードは他の分野でも多く使われるようになった。健康志向が行き過ぎて「抗菌ブーム」が起こり、潔癖症候群が蔓延した。

新聞記事には「芽吹き of 森林の新しい価値」、「森から見た文明—森に関する本」、「田舎暮らし」、「定年婦農」、「オーガニックデザイン脚光再び」、「『オーガニックコットンに注目』」、「オーガニック食品元年」、「ナチュラルレス(ナチュラル・レストラン)」、「社会の健康損なう潔癖症」、「若者に健康ナルシスト」などの見出しがある。

3. こころの時代

物質的豊かさのある程度獲得した日本人は、バブル経済崩壊後、経済的価値観にむなしさを覚え、人々は「こころ」の問題に関心を移行させた。さまざまな犯罪(特に少年による犯罪)が多発し、自分探しも始まった。一方で、他者(特に社会的弱者)を思いやる「こころ」も芽生えてきた。

いじめ

1995年頃、小中学校においていじめが社会問題化し始めた。1999年には公立小中学校で校内暴力が3万件を超え、過去最高を記録した。

新聞記事には、「椅子とりゲーム、いじめの陰湿化」、「精神（こころ）の不良債権」、「時代の叫び『暴力』がテーマの小説」などの見出しがある。

少年犯罪

少年犯罪は凶悪化、粗暴化の傾向が続いた。1997年に神戸で起きた小学6年少年殺害事件、2001年に大阪で起きた小学校児童8人殺傷事件は世の中に大きな衝撃を与えた。この時期、事件の多発と同時に犯罪者の低年齢化が問題になった。

新聞記事には、「少年と暴力、イイコ症候群、人からよく見られたい」、「14歳という年齢」、「中学生のナイフ殺傷事件相次ぐ」、「透明なボク、神戸小6殺害事件」、「なぜ人を殺してはいけないのか」、「未熟な若者生む成熟社会」、「罪悪感持たぬ青少年の増加」、「世相を映す少年犯罪、『いきなり型』にも前兆（長崎市幼児誘拐殺人事件）」などの見出しが目立った。

ストーカー

この時期、ストーカー（病的執拗さで相手を追いかけて回す人）が増殖し、社会問題になった。2000年には「ストーカー規制法」が成立した。「ストーカー」は1996、7年の流行語になった。また、小説の題材にもなった。

新聞記事には、「ストーカーの認知、言葉を得た犯罪性」、「しのびよるストーカー」、「現代の病理、ストーカー」、「ストーカー小説、若手作家発表」などの見出しが見られる。

オウム真理教

1995年にオウム真理教による「地下鉄サリン事件」が発生した。前後して松本サリン事件、坂本弁護士一家殺害事件など計13件の事件を起こし、27人を死亡させた。サリンを使った不特定多数に対する無差別テロは全国民を震撼させた。メディアはさまざまな角度からこの問題を取り上げた。

新聞記事には、「『オウム』を生む社会の解明」、「ゆがんだ鏡—オウム真理教」、「『殺人本』にむらがる現代人」、「ミイイズムの果て—オウム真理教」などの見出しが見られる。

自殺

この10年間、自殺者は年々増加した。2003年には年間3万4427人で過去最高を記録した。30歳代の急増が目立つ。動機では、経済・生活問題、勤務問題の増加が著しい。同年、過労死も過去最多となった。企業のリストラによる失業、長時間労働に伴う過度のストレスなど、自殺に至る要因が増大した。

新聞記事には、「うつ病、子どもに広がる」、「働き盛りの男性、自殺急増（年間自殺者3万人）」、

「伴侶の死、どう克服」、「心の病、悩みの内実を告白する本」などの見出しが見られる。

自分探し／哲学

高度経済成長期からバブル経済期にかけて、長い間、ひたすら走り続けた日本人が停滞のときを迎え、立ち止まって見て、「自らのアイデンティティは何か」を問い直すようになった。従来、難しいものとされてきた哲学が、日常の言葉で分かりやすく語られる哲学のブームが起こった。1995年にはノルウェイ人作家ヨースタイン・ゴルデルの『ソフィーの世界』が刊行され、ベストセラーになった。14歳の少女ソフィーへの哲学者からの手紙という形式で、やさしく哲学が語られている。今、「ナルシズム」の時代。自己愛人間が闊歩する社会では、内なるものに関心が向かい、「自分探し」が始まった。

新聞記事には、「個の時代に求められる自分の生き方」、「『多重人格』ブーム、自分探し、変身願望」、「哲学ブーム—自分とは何か」、「新しい波『わかる哲学』が登場」、「哲学の復権『ソフィーの世界』」、「『ソフィーの世界』、私はだれ?」、「哲学の新しい波、日常の言葉で語る」、「現代哲学の意味を問い直すシンポジウム」などの見出しが見られる。

社会的弱者にも光（バリアフリー／ユニバーサルデザイン）

「どのような障害を持つ人も安心して暮らせる障壁のない状態」をバリアフリーという。この10年間の前半に、バリアフリーの思想は広がり始めた。住環境や公共交通機関・公共施設において、障害者や高齢者が利用できるような物理的なバリアのみならず、人々の意識に潜む偏見を取り除く意識面のバリアも含む。後半になると、「ユニバーサル・デザイン」という思想が広がり始めた。空間作りや商品のデザインに関し、だれもが利用しやすいデザインを初めから取り入れておこうとする考え方で、障害者や高齢者のみならず、健常者も対象にしている。

また、障害者や高齢者が健常者と同じように行動し活躍できるように、旅行、スポーツ、美術、文学、映画など、さまざまな分野で社会的弱者に対して手を差し伸べ、光を当てるようになった。

新聞記事には、「弱者の復讐・反抗」、「内なるバリアフリーを求めて～福祉の発想から人間観の拡張へ～」、「広がるユニバーサルデザイン」、「ユニバーサルデザイン市場拡大」、「ユニバーサル・ファッション—画一化告発する思想」、「バリアフリー思想の普及」、「バリアフリー出版、点字本も発売」、「障害者向けスポーツ、レジャー雑誌続々」、「障害者もダイビング」、「身障者向け旅行推進」、「車椅子の旅を応援、ガイドブックや専門タクシー」、「障害者ツアーで介助ボランティア」、「視覚障害者、スポーツの場広がる」、「快適なバリアフリー旅行」、「バリアフリー旅行が拡大、車椅子シニア」、「『精神障害』描く映画続々」、「ろう者によるろう文化の映画表現」、「障害者、高齢者演劇の新たな担い手」、「障害者アートの国際芸術祭、年1回開催へ」、「アウトサイダーアート、美術界で重み増す」、「アウトサイダーアート、福祉の枠超えた広がり」、「映画館、障害者に優しく」、「視覚障害者向け『聴く映画』」、「『ハンセン病文学全集』刊行」、「ノンフィクション新星続々—ハンセン病や『在日』社会」、「老いをテーマにした映画（『午後の遺

言状』)、*「老いを見直す『老人本』*(永六輔『大往生』、赤瀬川原平『老人力』、日野原重明『生き方上手』、石原慎太郎『老いてこそ人生』)、*「枯れない老人小説*(渡辺淳一『エ・アロール』)、*「高齢化社会にらむ新雑誌」*などの見出しが多く見られる。

癒し

ストレスレベルの高かったこの10年間、「癒し(ヒーリング)」というキーワードがさまざまな分野で使われた。ヒーリング・ミュージックは心身の疲労を回復させるための音楽で、CDショップでは、グレゴリア聖歌、モーツアルトの音楽、環境音楽、声明、民俗音楽など幅広い領域の音楽を一つのジャンルにまとめて陳列された。

英国式園芸は「ガーデニング」という表現で、一戸建て住宅の庭やマンションのベランダを美しい花々で飾った。また、精神的な疲れを癒す療法として各種の動物・植物・アートによるセラピーが盛んになった。中でも、「アロマセラピー」は爆発的なブームになった。「笑い」に対する関心も高まり、学会も設立された。

新聞記事には、「心を取り戻せ、現代人」、「CM『癒し』から『励まし』へ」、「英国式園芸、女性に人気」、「ガーデニング留学」、「園芸療法」、「『癒す心、蘇る力』ブックフェア」、「『癒す心』(healing)」、「ヒーリング・ミュージック」、「音楽、心とからだ癒す効果」、「『グレゴリア聖歌』なぞのヒット」、「音楽療法、活躍の場広がる」、「『いやし』の音楽—大江光」、「ヒーリング音楽、米国同時テロの影響か」、「日本的癒しに学問から光」、「ヒーリング・アート、病院に」、「ハーブブーム、買うから『育てる』」、「アニマル・セラピー」、「イルカセラピー」、「『笑い』を学問する」、「癒しから許しへ『世界に一つだけの花』(SMAP)—存在認められたい若者—」などの見出しが目立った。

生と死

本格的な少子・高齢社会の入り口に立ち、人々は「生」(=少子)と「死」(=高齢)について、今まで以上に考えざるを得なくなってきた。アルフォンス・デーケン氏(当時は上智大学教授)の「死の準備教育(death education)」が提唱された時期でもある。

新聞記事には、「『チベット』ブーム(死後の世界)」、「新たな死生学、生命を文化的に問い直す」、「若者は今、『生と死を考える』」、「変容する死の周辺」、「生と死、自らの価値判断持て、A. デーケン」、「『生と死』中高生の教育に」、「『死』『別れ』に学ぼう」などの見出しがある。

精神世界／スピリチュアル

WHO(世界保健機構)は「健康」を、「健康とは身体的、精神的、および社会的に良好な状態であり、単に疾病または病弱の存在しないことではない」と定義している。さらに、加盟国から「スピリチュアル」という文言を追加修正する提案が出された。「スピリチュアル」とは「精神的な」「霊的な」という意味である。ここには宗教的な概念と、やや怪しげな概念が混在している。書店には「精神世界」のコーナーが出来た。また、この時期、『脳内革命』(春山茂雄)

がベストセラーになるなど、「脳」に対する関心も高まった。

新聞記事には、『『スピリチュアリティ』に脚光』、『『スピリチュアリティ』、宗教を超えるネットワークの広がり』、『生活に根を下す『精神世界』』、『精神世界への関心』、『脳科学、書店でブーム (脳内革命)』などの見出しがある。

宗教

現代の日本人は宗教に関しては無関心、または無宗教であったが、この時期、宗教への関心が高まった。宗教に関する書籍や音楽ソフトが多数出版され、禅寺での座禅体験、中には仏門に入る人も出てきた。

新聞記事には、『仏の教えの原点、現代に問い直す』、『仏教関連の書籍・音楽ソフトブーム』、『世紀末の癒し? 仏門ブーム』、『ちょっとだけ仏教徒(お経・座禅)』、『寺体験一癒し求めて』、『座禅、若者に静かな人気』、『やさしい仏教入門書が続々』、『仏門をくぐる』、『日本人の宗教問う著作相次ぐ』、『信仰一魂を探る旅へーやすらぎと生きがいを求めて』、『伝統文化がおしゃれ』、『読経』、『座禅』、『香』、『『よい加減』のすすめ、宗教復活の世界』、『重要度増す宗教や死生観への関心』、『チベット』ブーム (死後への関心)』、『老荘思想で内面への“旅”』、『声明ブーム』、『中高年に西行ブーム』、『最澄、現代に通じる知識人再評価』、『現代に通じる蓮如の精神、没後500年』などの見出しが見られた。

4. 家族の絆の崩壊

家族関係のゆらぎ

今、家族関係が歴史的な変化の時期にある。父親を中心とした、強い絆で結ばれた伝統的な家族像が壊れ始めた。夫と妻の関係、親と子どもの関係など、家族関係が揺らいでいる。家庭内別居、家庭内暴力、離婚の増加、社会的引きこもり、アダルト・チルドレンの問題など、家庭内のコミュニケーションの希薄化に伴う家族病理が多々発生している。今、「新しい共生体としての家族」像を模索する時である。

新聞記事には、『家族の世紀を超えて』、『壊れる家族、30代後半の辛さ克明』、『『家族』『自然』を重視、21世紀初頭の消費者』、『団塊家族一新・ニューファミリー』、『家族のきずな』、『家族論』、『新たな家族関係模索の時』、『増える離婚、残る男女格差』、『妻たちの離陸、離陸期の夫』、『父親崩壊、母性充満する家庭』、『自己チュー』、『『自分以外はバカ』の時代、ばらばらの個人』などの見出しが目立つ。

パラサイト・シングル

1999年に『パラサイト・シングルの時代』(山田昌弘著)が刊行され、その後この言葉が定着した。学卒後もなお親と同居し、基礎的生活条件を親に依存して、レジャーに旅行にブランド物に、リッチな生活を謳歌する未婚者(男女)を「パラサイト・シングル」と呼ぶ。

パラサイト・シングルは近年上昇の一途をたどっている。これは晩婚化、未婚化が進んだ結果であると同時に、晩婚化、未婚化の原因ともなっている。この「スパイラル現象」により、「パラサイト・シングル」は自己増殖する存在になっている。親の経済的余裕も、子どもの依存体質を増長させている。

この現象は少子化を促進し、その後、話題になっているフリーターやニートの問題に直結している。新聞記事には、「パラサイト・シングル増殖中」、「増えるパラサイト同棲、依存度高まる」、「パラサイト一族のきずな」、「さよなら『パラサイト』」などの見出しが見られる。

アダルト・チルドレン

「アダルト・チルドレン」とは「現在の自分の生きづらさが親との関係に起因すると認めた人」のことをいう(信田さよ子)。アメリカではアルコール依存症の父親から受ける暴言・暴力、それによる母親からの共依存的支配を受ける子どもを指す言葉である。日本の場合、アルコール家族の問題ではなく、表面的には普通の家族であり、模範的な両親のもとで育った人たちがアダルト・チルドレンとしての苦しみを感している。親からの「愛情という名の支配」による苦しみである。一見愛情豊かな正しい家庭に満ちた支配(コントロール)による苦しみが、日本のアダルト・チルドレンの苦しみである。

新聞記事には、「自称アダルト・チルドレン増殖中」、「アダルト・チルドレン、疑似体験」、「家族に傷つくアダルト・チルドレン」、「イイコ症候群、人から良く見られたい」などの見出しが見られる。

引きこもり

社会活動や対人関係から遠ざかり、6ヵ月以上自宅などに引きこもっている状態を「引きこもり」と呼ぶ。不登校がそのまま長期化して「引きこもり」になるケースが多い。全国で数十万人ともいわれる。かつては若年のものであった引きこもり現象の年齢上限は年々高まり、30代後半にまで高齢化している。時には、家庭内暴力や自殺未遂に至ることもある。

新聞記事には、「引きこもる若者たち一人と生きたい」、「引きこもりの6割が大人」、「大人に広がる引きこもり」、「長期化『引きこもり』1/3が30歳以上」、「引きこもりのネガとポジ」などの見出しが見られる。

不倫願望

家族関係のきしみの一つに、夫婦関係がある。この時期、企業内や家庭内でのストレスのはけ口として「不倫願望」が強まった。離婚件数の増加とも関係があるかもしれない。『失樂園』(渡辺淳一)や『マディソン郡の橋』(R.J. ウォーラー)など、文学や映画に「不倫」をテーマにした作品が人気を集めた。

新聞記事には、「家族に居場所がない(マディソン郡の橋)」、「不倫願望—映画・小説の影響」、「現代日本の『不倫小説』」、「『失樂園』ブーム」などの見出しがある。

家庭内暴力／ドメスティック・バイオレンス (DV)

対両親暴力や幼児虐待を含む家庭内暴力の中で、特に夫や恋人など親密な関係にある異性から受ける暴力をドメスティック・バイオレンスという。2002年には相談件数が急増し、2004年に「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律」(DV防止法)が改正された。2000年頃から児童虐待が社会問題になり始め、2003年には相談件数が2万6500件になり、年々増加する深刻な社会問題となっている。2000年に「児童虐待の防止に関する法律」が施行された。

新聞記事には、「児童虐待で浮かぶ母親の孤独」、「児童虐待、集団生活で子育て学ぶ」、「DV、親密さはらむ暴力」などの見出しがある。

5. IT／デジタル化

この10年間、技術革新の面では大きく躍進した時期であった。1995年頃、パソコンが1台20万円を切り、インターネットへの接続が急上昇し、爆発的なブームになった。1996年にはデジタル衛星放送の本放送が始まった。1999年には、携帯電話・自動車電話・PHSの普及が4割を超えた。日本政府は5年以内に世界最先端のIT国家を目指して、2001年に「e-Japan戦略」を決定した。

コンピュータやPDAの進化だけでなく、ブロードバンドや無線LANなどによるインターネットとの常時接続が可能になり、「いつでも、どこでも」インターネットなどの情報ネットワークにアクセスできる環境を「ユビキタス社会」という。また、洋服やアクセサリのように、軽量・小型で身につけられる(ウェアラブル)コンピュータが開発され、携帯電話端末やノートパソコンへの応用も進んだ。

新聞記事には、「IT革命、広く生活を革新」、「ユビキタス社会が変える現実」、「ユビキタス社会到来」、「インターネット体験(インターネットカフェ)」、「ウェアラブル・コンピュータを着る」、「『ネット心中』続発、自殺の蔭に自己愛の破壊」などの見出しがある。

IT技術の革新は、文化の各領域で導入され、文化の享受者に大いに恩恵を与えた。

文学・出版業界においては、電子化が進み、従来の“紙に印刷する方式”からインターネットや携帯電話を通じて、小説その他の情報を配信するようになった。さらに、過去の貴重な資料や情報を、デジタル技術を駆使して保存・活用が出来るようになった(「アーカイブス」)。

新聞記事には、「パソコン通信が新しい文学の場に」、「CD-ROM付き雑誌創刊ラッシュ」、「電子メディアで次の時代の価値観を」、「電子メディアと表現」、「電子文芸(インターネット)」、「書籍・雑誌の『電子化』加速」、「インターネットで文学堪能」、「文学全集をテーマ別電子版に」、「電子情報文明は無敵か」、「オンデマンド出版(電子図書コピー)」、「ネットの企画、村上龍が雑誌」、「連載小説をケイタイで」、「名著の寿命、オンデマンドで復刻」、「デジタル国文学」、「携帯向けに小説は配信、ミステリー中心に」、「電子図書館づくり盛ん」などの見出しがある。

美術の分野においては、従来、美術館や博物館に行かなければ鑑賞することが出来なかった

が、IT化、デジタル化によって、インターネットなどを通じて居ながらにして「いつでも、どこでも」鑑賞できるようになった。また、貴重な資料をデジタル技術により保存し、必要に応じて検索できるようになった。

新聞記事には、「インターネット上にサイバーギャラリー」、「インターネットで美術館の社会開放」、「美術鑑賞、自宅のネットで（総務省）」、「バーチャル・シティ（仮想都市）」、「CGや音組合せ、デジタルアートに女性の熱い視線」、「仮想博物館で他人と会話も」、「デジタル・ミュージアムで文化財」、「アートにデジタルの波」、「デジタル博物館の可能性」、「文化遺産をデジタル保存、唐招提寺」、「デジタルアート講座」、「デジタル国文学」、「デジタル・アーカイブス」、「デジタルー欲望の実現、負の遺産」、「聖なるバーチャル・リアリティ」などの見出しが目白押しだ。

映画・映像・演劇分野でもデジタル革命が起こり、製作面や鑑賞面で大いに進化を遂げた。映画の撮影から上映まで、デジタル信号のまま処理する「デジタルシネマ」が普及し始めた。

新聞記事には、「映画・映像のネット配信」、「電腦コミュニティで交流」、「CG映画、5年後はメジャーに（トイストーリー）」、「デジタル・アニメ元年」、「パソコン編集、映画に革命?」、「進むデジタル化、映画の未来演出」、「ブロードバンド到来、ネット・放送融合の時代」、「ダウンロードショー、ネット配信」、「よみがえる古典映画、デジタル技術で修復」、「映画館がデジタル武装」、「米映画界、デジタル革命」、「進歩するデジタル映画」、「デジタルカメラ・電子メモ帖として」、「デジタル・ビデオカメラ、年代超え夢中」、「デジタル資料、国立劇場で公開」などの見出しが見られる。

6. 新しい文化の模索

カルチュラル・スタディーズ

カルチュラル・スタディーズは、1960年代後半に、イギリスのバーミンガム大学の現代文化研究センターから始まったといわれている。その後、アメリカはじめ世界各国で研究されるようになった。日本には1980年代半ば以降に紹介され、この10年間に盛んに取り上げられるようになった。

カルチュラル・スタディーズとは、(高級文化に対する)大衆文化を、さまざまな学問や理論、概念を折衷したり、相対化して結び合わせる「文化研究」である。したがって、取扱う領域は極めて幅広く、フェミニズム、多文化主義、人種主義、文学、美術、音楽、映画、アニメ、コミックなどを対象とする。

新聞記事には、「カルチュラル・スタディーズ～『文化とは何か』を問う研究～」、「カルチュラル・スタディーズ～複数領域を横断する文化研究～」、「CS(カルチュラル・スタディーズ)」などの見出しが見られる。

クレオール文化

「クレオール(créole)」とは、フランス語で「植民地生まれの白人」という意味である。地域としては、アメリカ、カリブ海を囲むアンティル諸島の2つの島、グアドループ島とマルティニク島、南米大陸北岸のフランス領ギアナなどの地域を指し、時にはインド洋マダガスカル沖のレユニオン諸島などが加わることもある。クレオールはこれらの地域をヨーロッパ人が植民地化し、そこに生まれた生活世界の内実をまるまる意味する言葉になった。ヨーロッパの進出の衝撃を最もドラスティックに被ったのがカリブ海地域である。ヨーロッパ人の到来によって、30~40年の間に原住民はほぼ壊滅してしまい、アフリカ人が奴隷として移送された。移送された奴隷とその子供たちが作り出した言葉が「クレオール語」である。クレオール語は元来話し言葉であったが、その後、文字言葉が形成された。これらの地域では公用語にはヨーロッパ語が使われ、二重言語社会であった。また、これらの地域で生まれた文学を「クレオール文学」と呼ぶ。

この10年間に、多言語・多文化主義が台頭し、わが国でもクレオール文化およびクレオール文学・クレオール語に注目が集まった。

新聞記事には、「カリブ海文学の父セゼール」、「クレオールとは何か」、「多言語・多文化主義が台頭」、「クレオール混血で多様な文化」、「多言語社会の豊かな文学」、「クレオールからのメッセージ」、「文化の多様性」の危機、「クレオール受容新段階」、「クレオール語で描く民衆の力」、「多重言語小説、クレオール語」などの見出しが多く見られた。

ディアスポラ

世界の歴史の中で、植民地主義は3つの時代に分けられる。クリストファー・コロンブスが「新大陸」に到着した1492年が第1の時代。第2次世界大戦までの西洋による植民地支配が第2の時代、アジアやアフリカの植民地が欧米列強から相次いで独立した第2次世界大戦後および1950年代にかけてから、1990年代までの第3の時代である。植民地主義においては、宗主国は植民地の言語や文化の抹殺、民族的尊厳の剥奪、住民の虐殺と土着の経済機構の破壊を行った。これらの植民地主義を再検証するのがポストコロニアリズムである。

植民地支配の他に、近代の奴隷貿易、地域紛争や世界戦争、市場経済グローバリズムなど、何らかの外的な理由によって、多くの場合暴力的に、自らが本来属していた共同体から離散することを余儀なくされた人々、およびその末裔を指す言葉として「ディアスポラ」という表現がある。「新大陸」に連行された多くのアフリカ人とその子孫をブラック・ディアスポラと呼ぶ。19世紀後半から「苦力」と蔑称される下層労働者として、全世界に流れ出ていった中国人をチャイニーズ・ディアスポラと呼ぶ。

日本の植民地支配やアジア侵略戦争は、半世紀以上も前に形の上では終わっているが、アジア諸国との間で未解決の課題が残されている。最大の問題は、日本軍性奴隷制度から生還した女性たちから被害者の救済と補償を求められている「従軍慰安婦」問題である。さらに、わが国におけるディアスポラ、「在日朝鮮人」の問題がある。マイノリティである彼らは、マジョリ

ティである日本人との間で、さまざまな差別を未だに強いられている。

新聞記事には、「人権問題に対する意識高まる」、「境界の文明論」、「ディアスポラ『故郷離脱者』(ex.宇多田ヒカル)」、「『民族・宗教・アジア』vs『人権・環境・国際』新世紀の価値観」、「『在日文学』民族の壁を超える」、「ノンフィクション新星続々―ハンセン病や『在日』社会―」、「戦後補償学、恵泉女学園大学院に」などの見出しが見られる。

フェミニズム／ジェンダー

「フェミニズム」とは「女性の自由・平等・人権を求める思想」である。フェミニズムは18世紀欧米で形成された近代自由主義思想の申し子として誕生した。家父長制と性別役割分業システムに基づいた、男性支配のわが国にも影響を与え、明治時代に山川菊栄、与謝野晶子、平塚らいてうらの、多くの啓蒙知識人によって始まった。

第2次世界大戦後、日本国憲法第十四条によって、男女平等が謳われ女性の地位が向上した。その後「ウーマンリブ運動」が起り、1985年に女性に対する差別撤廃条約が国会で批准、1986年に雇用機会均等法が公布され、「女の時代」がコマーシャルで取り上げられた。1990年代に入ると「ジェンダー論」が盛んになった。ジェンダー概念は、フェミニズムの告発的形態を中和させ、その闘争的側面に違和感を持っていた女性たちや男性たちを、フェミニズム言説に巻き込んだ。一方、フェミニズムの風化現象がささやかれるようになった。

新聞記事には、「人権問題に対する意識高まる」、「フェミニズム離れ」、「フェミニズムが終わったか」、「男も『見た目』志向」、「女たちの静かな革命」、「『セクシャル・マイノリティ』活動盛ん」、「自治体『ジェンダーフリー絵本』」、「境界線上の美術―ジェンダー展」、「美術のジェンダー論」、「ジェンダー論、再考の季節」、「アリス・ウォーカー『勇敢な娘たち』発刊」という見出しが見られる。

フェミニズムは一見、下火になったように見えるが、女性の人権が完全に確保されたとはいえないのが現状である。企業においては、セクシャル・ハラスメントや(制度上は男女平等にもかかわらず)処遇面での格差、女性の非正規従業員としての雇用などの問題がある。性暴力、売買春、援助交際の問題も相変わらず存在し、「従軍慰安婦」問題も国際的に未解決のままである。

アジアへの関心

開国以来、日本人の眼は欧米に向いていた。アジア各国に対しては一段低く見る傾向があった。しかし、この10年間はアジアに対する関心が高まり、アジアの言葉、映画、美術、音楽その他の分野でアジアへの関心が高まり、相互が交流し、イベントが開催された。中国語を初めとしてアジア各国の語学講座が盛んに開講された。

新聞記事には、「新しいアジア学―アジアへの関心」、「アジアブーム(映画・音楽・雑誌)」、「アジア重視、東京国際映画祭」、「好きなアジアでちょっとOL」、「植民地の歴史とアジア美術」、「東南アジアの生活・文化を楽しむ」、「アジアと交流広がる舞台美術」、「インドワールド

(舞踊・映画・喫茶・ボディペインティング)、「インド映画ブーム」、「戦後25年、ベトナムに高まる関心」、「アジア現代美術ブーム」、「アジア美術に今を見る」、「アジア発音楽、ますます身近に」、「アジアの言語人気上昇(講座)」、「アジア語に魅せられて(講座)」、「英語の次は中国語—新人研修」、「語学学校、中国語講座多様化」、「中国語学習熱再来」、「アジア隣人同士、知の交流」、「アジアン、連帯・融合・躍動」などの見出しが見られる。

クール(かっこいい)

最近、「日本の文化は『クール』(かっこいい)」という表現が使われる。「クール」とは、「個人や小集団が、権威一親であろうと、教師や警察やボスや刑務所長であろうと—への反抗を表すためにとる敵対姿勢である」(『クール・ルールズ』)と定義されている。

「クール」は西アフリカの古代文明にまでさかのぼる。奴隷貿易によってアフリカからアメリカやヨーロッパに運ばれた人たちの態度から始まった。「クール」という概念が、現在持っているすべてを獲得したのは、20世紀に入ってからである。現代の「クール」と共通点の多い態度は、ドイツ・ロマン主義から、ダダイズムやシュルレアリズム、そしてニューヨークの抽象表現主義に至るまで、多くの国々のさまざまな芸術・文化運動の中に見られる。現代のポピュラー音楽と映画は、「クール」をその基本精神の一つとしており、「クール」を世界中に広める役割を果たしている。「クール」はアメリカ的な現象で、その後、諸外国へ伝播している。

音楽では、ブルースからロックンロールを経て、後のソウルやヒップホップのようなポピュラー音楽に伝わった。映画では、大衆の中に「クール」のイメージを焼き付けたのはジェームス・ディーンである。美術では、60年代のロイ・リキテンシュタインやジャスパー・ジョーンズなどの抽象表現主義の画家たちの後を受けて、アンディー・ウォーホルが「クール」のイメージを、芸術の新しい領域に定着させた。

日本のアートやアニメが「ジャパニーズ・クール」という言葉でグローバル規模で受け入れられている。小説では鈴木光司の『リング』、映画では桐野夏生原作の『OUT』、美術では村上隆の作品が、その代表的なものである。村上隆の場合、日本画の平面性とオタク文化をうまく結合させ、ハイカルチャーとサブカルチャーを融合させたところに「クール」の原点がある。

新聞記事には、「日本の文化は『クール』(かっこいい)」、「キャラクター新世紀、美術館が展覧」、「クール・ブリタニア—英国最先端カルチャー」、「ジャパニメーション、世界を魅了」、「サブ文化、美術館食う」、「アート化するマンガ」、「村上隆オタクアート、高額落札」、「ジャパン is cool—NY 発の日本文化」などの見出しが見られる。

おたく(オタク)／萌え

「おたく」という言葉が現在の意味で使われるようになったのは、1983年の『漫画ブリッコ』6月号で中森明夫が、コミックマーケットに集まるマニアたちを「おたく」と名付け、マニアたちが友人同士で「おたく」と呼び合うところに端を発する、といわれている。カタカナの「オタク」が最初に広まったのは、1989年の宮崎勤事件がきっかけになりネガティブなイメージが

広まった。その後、1995年に放映され数年ブームが続いた『新世紀エヴァンゲリオン』などによってオタクのイメージは変わっていった。また、音楽やグラフィックにおけるシブヤ系オタクも台頭した。

2004年のヴェネチア・ビエンナーレ第9回国際建築展の日本館で、「おたく：人格＝空間＝都市」というテーマで、コミック・アニメ・美少女フィギュアなどの「おたく文化」を展示することで、日本の新しい動向を紹介して、好評を博した。

「おたく」の世界では、ゲーム・アニメ・コミックなどを通じて、仮想現実（ヴァーチャル・リアリティ）を仮想現実とみなしてそれと戯れる立場をとる。

「萌え」という言葉は、かわいい美少女キャラなどに胸がときめく気持ちを表す新語である。アニメやゲームのファンの間では、1990年代初頭に「美少女戦士セーラームーン」がヒットした頃から広がっている。

『萌える英単語もえたん』（三オブックス）という異色の学習本が、2003年秋の出版以来17万部を超すヒットとなっている。日本一の電気街「秋葉原」は、今、「萌える都市」と呼ばれ、おたくの聖地となっている。

新聞記事には、「聖なるバーチャル・リアリティ」、「ホラー少女漫画ブーム」、「エヴァ現象、ロンバケブーム」、「“現実化”する仮想アイドル」、「キャラクター新世紀、美術館で展覧」、「コミックマーケット、オタク文化から大衆文化へ」、「ジャパニメーション、世界を魅了」、「『エヴァンゲリオン』が旋風」、「『もののけ姫』ロングラン」、「村上隆オタクアート、高額落札」、「マンガ学、大学で学科・課程」、「日本マンガ学会発足」、「『萌え』って何？ オタク文化の中心概念」などの見出しが出ている。

「J…」

この10年間、「J」というアルファベットを頭につけた言葉がいろいろな領域で使われた。「J」のさきがけとなったのは、1991年に創設された「Jリーグ」（社団法人日本プロサッカーリーグ）である。サッカーの人气が上昇するにつれて「J」は日本人の中になじんでいった。「J」という文字は、「旧来の日本的なものが死に、新しく再生した」というニュアンスを持っている。

サッカーに次いでポピュラーになったのが、「Jポップ」である。「Jポップ」は日本の土俗的な要素と決別し、洋楽に限りなく近づけた音楽であり、かつて歌謡曲、ロック、フォークなどと呼ばれたジャンルをすべて解体してシャッフルし、再構成した名称である。具体的には、宇多田ヒカル、サザンオールスターズ、浜崎あゆみ、B'z、UAなどのアーティストによる音楽である。「Jポップ」は1992～94年が勃興期にあたり、その背景には、①アナログからデジタルへの技術革新と②テレビやインターネットという新しい音楽マスメディアの登場がある。

ポップスのみならず、クラシック音楽の分野でも「Jクラシック」という、日本人による新しいクラシックが登場した。

新聞記事には、「ポピュラー音楽が学問の対象に（Jポップ論）」、「Jの感情史（Jポップ進化論）」、「『Jクラシカル』健闘」、「Jクラシック、YGB（ヤング・ギフトド&ビューティ

フル) 路線』、『Jポップ』を学問する』などの見出しがある。

日本語ブーム

この時期、日本語に対する関心が高まった。自分たちの母国語である日本語の使い方があまりにも乱れ、その見直しが始まった。書店には『声に出して読みたい日本語』(斎藤孝)など、「日本語」関連の書籍がコーナーを形成した。また、日本語ブームの延長線上に、小説や詩の朗読、子どもへの読み聞かせなど、朗読ブームが起こった。

新聞記事には、「方言を大切に『方言詩』『方言ラップ』『方言随筆』、『混雑性』を語る～日本語表現の根幹問う～」、「中高年に受ける『日本語』本」、「日本語論は社会を撃つ」、「国語のお勉強、『日本語練習帳』」、「なぜか『文語』に脚光」、「学会名、『日本語学』か『国語学』か」、「朗読ブーム」などの見出しがある。

教養／知の探求

「教養主義」が没落したいわれている。教養＝大学という構図で考えて見ると、かつて大学進学率が低く、大学生であることがエリートであった時代に、教養は高級文化を担うエリートのものであった。『三太郎の日記』や『善の研究』、岩波文庫などは教養の象徴であった。

1960年代後半から1970年代にかけて、大学への進学率が高まり(大学のレジャーランド化)、企業の大量採用が始まると、いわゆる「新中間大衆社会」が構成され、それまでの「特権的教養主義」は「大衆教養主義」に移行した。その後、テレビ、インターネット、ケイタイなどの、活字に代わる新しいメディアが普及するにしたがい、かつて教養の代名詞であった「読書」は人々から一定の距離がおかれ、教養は「じゃまもの」になった。

この10年間、「新しい教養とは何か」が問い直されるようになった。1994年に東京大学教養学部のサブテキストとして出版された『知の技法』はじめ「知の3部作」(東京大学出版会)はベストセラーになった。この現象は、かつての教養を「知」という表現で、新時代の教養のあり方を示唆しているのではないか。その後、多くの大学で出版が相次いだ。

新聞記事には「教養は総合力、大局観の基礎」、「新『教養主義』模索の動き」、「教養とは何か、時代の要請?」、「『知』の航海に旅立とう」、「東京大学教養学部『知の3部作』」、「設立が相次ぐ大学の出版会」、「教養・教育の危機」、「ムズカシイが好き!無教養世代の怪現象」などの見出しが見られる。

1970年代／昭和30年代ブーム

この10年間は、20世紀末からミレニアムを経て、21世紀初めにかかる大きな節目にあたり、「時代」ということを考えさせる期間であった。中高年にはノスタルジア、若者には新鮮に映る1970年代と昭和30年代に関心が集中した。レトロ感覚は、まちづくりやテーマパークにとり入れられ、音楽・ダンス・食べ物・出版物など多くの分野でこの時代を取り上げた。

新聞記事には、「70年代、今なぜ目立つのか」、「レトロ未来—70年代以前の家具」、「時代の

気分は70年代風」、「『昭和30年代』ブーム（テーマパーク・プラモデル・仮想都市）」、「昭和30年代も博物館入り」、「60-70年代の音楽カムバック」、「70-80年代の興奮、ディスコ復活」などの見出しが見られる。

田舎暮らし

「東京卒業」という新聞広告が出た。山口県が都会で暮らす地元出身者に向けて、Iターンを呼びかける自治体広告である。バブル崩壊後、都会でのサラリーマン生活に疲れ、自然に囲まれて田舎暮らしを希望する人が続出した。一方、過疎化で人口減（＝税収減）に悩む全国の地方自治体は都会人に対して、さまざまな恩典を付けて、Iターン、Uターンを呼びかけた。この傾向はこの原稿を執筆している現在も続いている。

新聞記事には、「『東京卒業』それぞれの決意」、「『就農』夢見る都会の熟年」、「グリーンツーリズム『週末農夫』」、「農のススメ」、「帰りなんいざ『定年帰農』」などの見出しが見られる。

まとめ

日本人は、戦後の復興期から高度経済成長期、バブル経済期に至るまでの、右肩上がりの約50年間を経て、バブル経済崩壊後の停滞の10年間を経験した。今回の「時代の風」分析を通して、この10年間のさまざまな「時代の風」を聴いてきた。そして、10年間の陰の部分と光の部分が浮き彫りになった。

「時代の風」の陰の部分で浮き彫りになったのは、3つの「差別」が未だに世界中で、そして日本で起こっていることである。1つは「性差別(sexism)」であり、2つは「人種差別(racism)」、3つは「年齢差別(ageism)」である。光の部分では、技術革新に伴うさまざまなライフスタイルの進化、日本文化のグローバル化など、「新しい文化の模索」の動きである。

歴史は過去・現在・未来へとつながる。この10年間の「時代の風」は次の「時代の風」に引き継がれる。この10年間の萌芽は、次の時代の開花につながる。おぼろげながら、次の「時代の風」が見えてきたように思われる。

<引用・参考文献>

山田昌弘『希望格差社会』（筑摩書房）

佐藤俊樹『不平等社会日本』（中公新書）

辻信一『スロー・イズ・ビューティフル』（平凡社）

中村正『家族のゆくえ』（人文書院）

パトリック・シャモワゾー&ラファエル・コンフィアン『クレオールとは何か』（平凡社）

本橋哲也『ポストコロニアリズム』（岩波新書）

徐京植『ディアスポラ紀行』（岩波新書）

竹内洋『教養主義の没落』(中公新書)

上野俊哉／毛利嘉孝『カルチュラル・スタディーズ入門』(ちくま新書)

鳥賀陽弘道『Jポップとは何か』(岩波新書)

山田昌弘『パラサイト・シングルの時代』(ちくま新書)

斎藤環『社会的ひきこもり』(PHP 新書)

信田さよ子『依存症』(文芸春秋)

大越愛子『フェミニズム入門』(ちくま新書)

ディック・パウンテン／デイヴィッド・ロビンズ『クール・ルールズ』(研究社)

大塚英志『「おたく」の精神史』(講談社現代文庫)

「ユリイカ」『オタク vs サブカル』(青土社)

「imidas 2005」(集英社)

<資料>

次頁の表は、1994～2003年の「経済・社会・文化・芸術年表」である。本文と直接連動しない内容もあるが、文化・芸術面の「時代の風」と、その時代背景としての経済・社会面の「時代の風」をまとめたものである。

	1994年	1995年	1996年	1997年	1998年
経済	経済成長率実質2.3%、名目2.2% 完全失業率2.8%、有効求人倍率0.64倍 国内のパソコン販売台数320万台、マルチメディア型機種登場(パソコン元年) 移動電話急成長 ゲーム業界の売上高1兆6300億円 松本サリン事件発生	経済成長率実質2.4%、名目1.8% 完全失業率3.1%、有効求人倍率0.64倍 阪神淡路大震災発生、学生中心にボランティア参加 地下鉄サリン事件発生 パソコン爆発的ブーム、20万円を切り、インターネットへの接続で急上昇 インターネットの普及	経済成長率実質3.6%、名目2.8% 完全失業率3.4%、有効求人倍率0.72倍 輸入非加熱血液製剤による薬害エイズ訴訟、和解成立 インタネート人気加速 子供の数、初めて2000万人を割る デジタル衛星放送、本放送開始 広がりが「リアリティ」の流れ	経済成長率実質0.6%、名目1.3% 完全失業率3.4%、有効求人倍率0.69倍 ロシア船難タンカー、重油大量流出 ロシヤで小学6年生殺害(酒鬼薔薇事件) 機器移植法公布(脳死を人の死とする) 金融システム不安、一気に拡大 地球温暖化防止京都会議 テロ保険法公布	経済成長率実質-1.0%、名目-1.6% 完全失業率4.2%、有効求人倍率0.50倍 預金保険機構、都市銀行に公的資金投入 第18回冬季オリンピック長野大会 和歌山で毒物カレシ事件発生 65歳以上人口、総人口の16.2%に 特定非営利活動促進法(NPO法)施行 環境ホルモンの社会問題
社会	第17回日本アカデミー賞、山田洋次監督 ＜学校＞が6部門受賞 永六輔＜大往生＞ 日本学術会議、人工的な栄養供給中止な ど一歩踏み込んだ＜尊厳死＞を認める 文部省、ポラリテティ活動で大学入試実 施要綱に初めて追加 大江健三郎、ノーベル文学賞受賞 関西空港ターミナルビル(設計レンゾ・ ピアノ)オープン 第110回芥川賞、奥泉光＜石の来歴＞第 110回直木賞、大沢在昌＜新宿鮫無間人 形＞・佐藤雅美＜恵比寿屋兵衛手控 え＞ 第111回芥川賞、左野禰子＜タイムスリッ プ、コンピナート＞・室井光広＜おどる でく＞。第111回直木賞、海老沢泰久＜帰 郷＞・中村彰彦＜二つの山河＞	公立学校の週5日制、第2、第4土曜日 東京都写真美術館開館 東京都現代美術館開館 ゴルファー著＜ソフィアの世界＞ 第18回日本アカデミー賞最優秀作品賞、 深作敏二監督＜忠臣蔵外伝四谷怪談＞ 柳田邦男＜構性＞が息子・脳死の11日 荒川修作設計＜養老天命反転地＞開園 ＜CD-ROM版新朝文庫の100冊＞発行 ＜午後＞の遺言状(新藤兼人) 国内で＜マンガ＞の成長、頭打ちに、海 外では日本産アニメが順調に浸透 第113回芥川賞、保坂和志＜この人の 関＞。第113回直木賞、赤瀬川隼＜白球 映＞	＜こころ＞の時代の到来 小学館の電子ブック版＜日本大百科全 書＞、平凡社＜世界大百科事典＞など百 科事典や辞書の＜電子出版＞本格化 ＜文化＞ブーム(三内九郎田道跡発掘) 文部省、＜アーツ・プログラム21＞助成団体発表 全国初の電子図書館(奈良先端科学技術 大学院大学) 宮沢賢治生誕100年、出版、イベント レトロな時代のハイテク感覚 春山茂雄＜脳内革命＞野口悠紀雄＜超絶 強法＞近藤誠＜患者よ、がんばろうな＞ 第114回直木賞、又吉忠告＜豚の頬い、 第114回芥川賞、小池真理子＜恋＞・藤原 伊織＜テロリスト＞のバラスル 第115回芥川賞、川上弘美＜蛇を踏む＞、 第115回直木賞、乃南アサ＜凍える牙＞	テレビ東京＜ボケットモンスター＞視聴 中の小・中学生が失神、騒音 アダルト・チルドレンの注目が 渡辺淳一＜失業圏＞300万部ベストセ ラー 村上春樹＜アンダーグラウンド＞ ネオ・オタクな若者たちの誕生 アニメ＜ものけぢ＞史上初売上 映画＜新世紀エヴァンゲリオン劇場版＞ シュベール生誕200年記念企画 年30日以上不登校小中学生10万人超える マルチメディア百科事典刊行相次ぐ 仁成＜海峡の光＞、第116回直木賞、坂東 眞砂子＜山嶽＞ 第117回芥川賞、目取真俊＜水滴＞第117 回直木賞、篠田節子＜女たちのジハー ド＞・浅田次郎＜鉄道員ぼっぼや＞	経済成長率実質3.2%、名目0.8% 完全失業率5.1%、有効求人倍率0.69倍 合計特殊出生率1.32に(人口減少社会) ネット仲間が集団自殺 牛のBSE感染広がる 新型肺炎SARSで海外旅行者減少 ホームレス全国で2万5千人 過労死が過去最多に(160件) ＜ユビキタス＞社会(ケータイ社会) ＜歴史＞を見据えた文学作品 ＜バカの壁＞がブームに(247万部) 村上隆、日本のオタク文化をアートの SMAP＜世界に一つだけに花＞ヒット ＜ポウリング・フォ・コロコロン＞ ＜WATARIDORI＞ドキュメンタリーが観作 にきわまった＜歌舞伎四百年＞ イラク戦争・北朝鮮問題が論壇で沸騰 第129回芥川賞、吉村高志＜ハリガネム シ＞、第129回直木賞、石田衣良 ＜4TEEN＞・村山由佳＜星々の舟＞ 第130回芥川賞、金原ひとみ＜蛇にピア ス＞・綿矢りさ＜蹴りたい背中＞、130 回直木賞、京極夏彦＜後巷説百物語＞・ 江国香織＜号泣する準備はできていた＞
文化	第17回日本アカデミー賞、山田洋次監督 ＜学校＞が6部門受賞 永六輔＜大往生＞ 日本学術会議、人工的な栄養供給中止な ど一歩踏み込んだ＜尊厳死＞を認める 文部省、ポラリテティ活動で大学入試実 施要綱に初めて追加 大江健三郎、ノーベル文学賞受賞 関西空港ターミナルビル(設計レンゾ・ ピアノ)オープン 第110回芥川賞、奥泉光＜石の来歴＞第 110回直木賞、大沢在昌＜新宿鮫無間人 形＞・佐藤雅美＜恵比寿屋兵衛手控 え＞ 第111回芥川賞、左野禰子＜タイムスリッ プ、コンピナート＞・室井光広＜おどる でく＞。第111回直木賞、海老沢泰久＜帰 郷＞・中村彰彦＜二つの山河＞	公立学校の週5日制、第2、第4土曜日 東京都写真美術館開館 東京都現代美術館開館 ゴルファー著＜ソフィアの世界＞ 第18回日本アカデミー賞最優秀作品賞、 深作敏二監督＜忠臣蔵外伝四谷怪談＞ 柳田邦男＜構性＞が息子・脳死の11日 荒川修作設計＜養老天命反転地＞開園 ＜CD-ROM版新朝文庫の100冊＞発行 ＜午後＞の遺言状(新藤兼人) 国内で＜マンガ＞の成長、頭打ちに、海 外では日本産アニメが順調に浸透 第113回芥川賞、保坂和志＜この人の 関＞。第113回直木賞、赤瀬川隼＜白球 映＞	＜こころ＞の時代の到来 小学館の電子ブック版＜日本大百科全 書＞、平凡社＜世界大百科事典＞など百 科事典や辞書の＜電子出版＞本格化 ＜文化＞ブーム(三内九郎田道跡発掘) 文部省、＜アーツ・プログラム21＞助成団体発表 全国初の電子図書館(奈良先端科学技術 大学院大学) 宮沢賢治生誕100年、出版、イベント レトロな時代のハイテク感覚 春山茂雄＜脳内革命＞野口悠紀雄＜超絶 強法＞近藤誠＜患者よ、がんばろうな＞ 第114回直木賞、又吉忠告＜豚の頬い、 第114回芥川賞、小池真理子＜恋＞・藤原 伊織＜テロリスト＞のバラスル 第115回芥川賞、川上弘美＜蛇を踏む＞、 第115回直木賞、乃南アサ＜凍える牙＞	テレビ東京＜ボケットモンスター＞視聴 中の小・中学生が失神、騒音 アダルト・チルドレンの注目が 渡辺淳一＜失業圏＞300万部ベストセ ラー 村上春樹＜アンダーグラウンド＞ ネオ・オタクな若者たちの誕生 アニメ＜ものけぢ＞史上初売上 映画＜新世紀エヴァンゲリオン劇場版＞ シュベール生誕200年記念企画 年30日以上不登校小中学生10万人超える マルチメディア百科事典刊行相次ぐ 仁成＜海峡の光＞、第116回直木賞、坂東 眞砂子＜山嶽＞ 第117回芥川賞、目取真俊＜水滴＞第117 回直木賞、篠田節子＜女たちのジハー ド＞・浅田次郎＜鉄道員ぼっぼや＞	経済成長率実質3.2%、名目0.8% 完全失業率5.1%、有効求人倍率0.69倍 合計特殊出生率1.32に(人口減少社会) ネット仲間が集団自殺 牛のBSE感染広がる 新型肺炎SARSで海外旅行者減少 ホームレス全国で2万5千人 過労死が過去最多に(160件) ＜ユビキタス＞社会(ケータイ社会) ＜歴史＞を見据えた文学作品 ＜バカの壁＞がブームに(247万部) 村上隆、日本のオタク文化をアートの SMAP＜世界に一つだけに花＞ヒット ＜ポウリング・フォ・コロコロン＞ ＜WATARIDORI＞ドキュメンタリーが観作 にきわまった＜歌舞伎四百年＞ イラク戦争・北朝鮮問題が論壇で沸騰 第129回芥川賞、吉村高志＜ハリガネム シ＞、第129回直木賞、石田衣良 ＜4TEEN＞・村山由佳＜星々の舟＞ 第130回芥川賞、金原ひとみ＜蛇にピア ス＞・綿矢りさ＜蹴りたい背中＞、130 回直木賞、京極夏彦＜後巷説百物語＞・ 江国香織＜号泣する準備はできていた＞
芸術	第17回日本アカデミー賞、山田洋次監督 ＜学校＞が6部門受賞 永六輔＜大往生＞ 日本学術会議、人工的な栄養供給中止な ど一歩踏み込んだ＜尊厳死＞を認める 文部省、ポラリテティ活動で大学入試実 施要綱に初めて追加 大江健三郎、ノーベル文学賞受賞 関西空港ターミナルビル(設計レンゾ・ ピアノ)オープン 第110回芥川賞、奥泉光＜石の来歴＞第 110回直木賞、大沢在昌＜新宿鮫無間人 形＞・佐藤雅美＜恵比寿屋兵衛手控 え＞ 第111回芥川賞、左野禰子＜タイムスリッ プ、コンピナート＞・室井光広＜おどる でく＞。第111回直木賞、海老沢泰久＜帰 郷＞・中村彰彦＜二つの山河＞	公立学校の週5日制、第2、第4土曜日 東京都写真美術館開館 東京都現代美術館開館 ゴルファー著＜ソフィアの世界＞ 第18回日本アカデミー賞最優秀作品賞、 深作敏二監督＜忠臣蔵外伝四谷怪談＞ 柳田邦男＜構性＞が息子・脳死の11日 荒川修作設計＜養老天命反転地＞開園 ＜CD-ROM版新朝文庫の100冊＞発行 ＜午後＞の遺言状(新藤兼人) 国内で＜マンガ＞の成長、頭打ちに、海 外では日本産アニメが順調に浸透 第113回芥川賞、保坂和志＜この人の 関＞。第113回直木賞、赤瀬川隼＜白球 映＞	＜こころ＞の時代の到来 小学館の電子ブック版＜日本大百科全 書＞、平凡社＜世界大百科事典＞など百 科事典や辞書の＜電子出版＞本格化 ＜文化＞ブーム(三内九郎田道跡発掘) 文部省、＜アーツ・プログラム21＞助成団体発表 全国初の電子図書館(奈良先端科学技術 大学院大学) 宮沢賢治生誕100年、出版、イベント レトロな時代のハイテク感覚 春山茂雄＜脳内革命＞野口悠紀雄＜超絶 強法＞近藤誠＜患者よ、がんばろうな＞ 第114回直木賞、又吉忠告＜豚の頬い、 第114回芥川賞、小池真理子＜恋＞・藤原 伊織＜テロリスト＞のバラスル 第115回芥川賞、川上弘美＜蛇を踏む＞、 第115回直木賞、乃南アサ＜凍える牙＞	テレビ東京＜ボケットモンスター＞視聴 中の小・中学生が失神、騒音 アダルト・チルドレンの注目が 渡辺淳一＜失業圏＞300万部ベストセ ラー 村上春樹＜アンダーグラウンド＞ ネオ・オタクな若者たちの誕生 アニメ＜ものけぢ＞史上初売上 映画＜新世紀エヴァンゲリオン劇場版＞ シュベール生誕200年記念企画 年30日以上不登校小中学生10万人超える マルチメディア百科事典刊行相次ぐ 仁成＜海峡の光＞、第116回直木賞、坂東 眞砂子＜山嶽＞ 第117回芥川賞、目取真俊＜水滴＞第117 回直木賞、篠田節子＜女たちのジハー ド＞・浅田次郎＜鉄道員ぼっぼや＞	経済成長率実質3.2%、名目0.8% 完全失業率5.1%、有効求人倍率0.69倍 合計特殊出生率1.32に(人口減少社会) ネット仲間が集団自殺 牛のBSE感染広がる 新型肺炎SARSで海外旅行者減少 ホームレス全国で2万5千人 過労死が過去最多に(160件) ＜ユビキタス＞社会(ケータイ社会) ＜歴史＞を見据えた文学作品 ＜バカの壁＞がブームに(247万部) 村上隆、日本のオタク文化をアートの SMAP＜世界に一つだけに花＞ヒット ＜ポウリング・フォ・コロコロン＞ ＜WATARIDORI＞ドキュメンタリーが観作 にきわまった＜歌舞伎四百年＞ イラク戦争・北朝鮮問題が論壇で沸騰 第129回芥川賞、吉村高志＜ハリガネム シ＞、第129回直木賞、石田衣良 ＜4TEEN＞・村山由佳＜星々の舟＞ 第130回芥川賞、金原ひとみ＜蛇にピア ス＞・綿矢りさ＜蹴りたい背中＞、130 回直木賞、京極夏彦＜後巷説百物語＞・ 江国香織＜号泣する準備はできていた＞
経済・社会	経済成長率実質3.0%、名目1.0% 完全失業率4.9%、有効求人倍率0.62倍 介護保険制度スタート 携帯電話によるインターネット接続100 万台突破、IT革命 雪印乳業大阪工場、集団食中毒事件 世田谷で赤痢土一家殺害事件 BS(放送衛星)デジタル放送開局 失われた10年、ミレニアム 佐藤俊樹＜不平等社会日本＞ 村上龍＜希望の国のエクソダス＞ インターネット上で電子書籍を販売する ＜電子文庫アプリ＞オープン シネマコンプレックスによりスクリーン急増 ＜パトル・ロワイヤル＞社会問題化 中村勘九郎、平成中村座(鶴岡川右衛 大平光代＜だから、あなとも生きぬいて＞ 浦寿輝＜花腐し＞、第123回直木賞、金城 一紀＜GO＞・船戸与一＜虹の谷の5月＞ 第124回芥川賞、青来有一＜聖水＞・堀江 敏幸＜熊の敷石＞、第124回直木賞、重松 清＜ピタミニア＞山本文緒＜プラナリア＞	失われた10年、ミレニアム 佐藤俊樹＜不平等社会日本＞ 村上龍＜希望の国のエクソダス＞ インターネット上で電子書籍を販売する ＜電子文庫アプリ＞オープン シネマコンプレックスによりスクリーン急増 ＜パトル・ロワイヤル＞社会問題化 中村勘九郎、平成中村座(鶴岡川右衛 大平光代＜だから、あなとも生きぬいて＞ 浦寿輝＜花腐し＞、第123回直木賞、金城 一紀＜GO＞・船戸与一＜虹の谷の5月＞ 第124回芥川賞、青来有一＜聖水＞・堀江 敏幸＜熊の敷石＞、第124回直木賞、重松 清＜ピタミニア＞山本文緒＜プラナリア＞	＜こころ＞の時代の到来 小学館の電子ブック版＜日本大百科全 書＞、平凡社＜世界大百科事典＞など百 科事典や辞書の＜電子出版＞本格化 ＜文化＞ブーム(三内九郎田道跡発掘) 文部省、＜アーツ・プログラム21＞助成団体発表 全国初の電子図書館(奈良先端科学技術 大学院大学) 宮沢賢治生誕100年、出版、イベント レトロな時代のハイテク感覚 春山茂雄＜脳内革命＞野口悠紀雄＜超絶 強法＞近藤誠＜患者よ、がんばろうな＞ 第114回直木賞、又吉忠告＜豚の頬い、 第114回芥川賞、小池真理子＜恋＞・藤原 伊織＜テロリスト＞のバラスル 第115回芥川賞、川上弘美＜蛇を踏む＞、 第115回直木賞、乃南アサ＜凍える牙＞	テレビ東京＜ボケットモンスター＞視聴 中の小・中学生が失神、騒音 アダルト・チルドレンの注目が 渡辺淳一＜失業圏＞300万部ベストセ ラー 村上春樹＜アンダーグラウンド＞ ネオ・オタクな若者たちの誕生 アニメ＜ものけぢ＞史上初売上 映画＜新世紀エヴァンゲリオン劇場版＞ シュベール生誕200年記念企画 年30日以上不登校小中学生10万人超える マルチメディア百科事典刊行相次ぐ 仁成＜海峡の光＞、第116回直木賞、坂東 眞砂子＜山嶽＞ 第117回芥川賞、目取真俊＜水滴＞第117 回直木賞、篠田節子＜女たちのジハー ド＞・浅田次郎＜鉄道員ぼっぼや＞	経済成長率実質3.2%、名目0.8% 完全失業率5.1%、有効求人倍率0.69倍 合計特殊出生率1.32に(人口減少社会) ネット仲間が集団自殺 牛のBSE感染広がる 新型肺炎SARSで海外旅行者減少 ホームレス全国で2万5千人 過労死が過去最多に(160件) ＜ユビキタス＞社会(ケータイ社会) ＜歴史＞を見据えた文学作品 ＜バカの壁＞がブームに(247万部) 村上隆、日本のオタク文化をアートの SMAP＜世界に一つだけに花＞ヒット ＜ポウリング・フォ・コロコロン＞ ＜WATARIDORI＞ドキュメンタリーが観作 にきわまった＜歌舞伎四百年＞ イラク戦争・北朝鮮問題が論壇で沸騰 第129回芥川賞、吉村高志＜ハリガネム シ＞、第129回直木賞、石田衣良 ＜4TEEN＞・村山由佳＜星々の舟＞ 第130回芥川賞、金原ひとみ＜蛇にピア ス＞・綿矢りさ＜蹴りたい背中＞、130 回直木賞、京極夏彦＜後巷説百物語＞・ 江国香織＜号泣する準備はできていた＞
文化・芸術	第17回日本アカデミー賞、山田洋次監督 ＜学校＞が6部門受賞 永六輔＜大往生＞ 日本学術会議、人工的な栄養供給中止な ど一歩踏み込んだ＜尊厳死＞を認める 文部省、ポラリテティ活動で大学入試実 施要綱に初めて追加 大江健三郎、ノーベル文学賞受賞 関西空港ターミナルビル(設計レンゾ・ ピアノ)オープン 第110回芥川賞、奥泉光＜石の来歴＞第 110回直木賞、大沢在昌＜新宿鮫無間人 形＞・佐藤雅美＜恵比寿屋兵衛手控 え＞ 第111回芥川賞、左野禰子＜タイムスリッ プ、コンピナート＞・室井光広＜おどる でく＞。第111回直木賞、海老沢泰久＜帰 郷＞・中村彰彦＜二つの山河＞	失われた10年、ミレニアム 佐藤俊樹＜不平等社会日本＞ 村上龍＜希望の国のエクソダス＞ インターネット上で電子書籍を販売する ＜電子文庫アプリ＞オープン シネマコンプレックスによりスクリーン急増 ＜パトル・ロワイヤル＞社会問題化 中村勘九郎、平成中村座(鶴岡川右衛 大平光代＜だから、あなとも生きぬいて＞ 浦寿輝＜花腐し＞、第123回直木賞、金城 一紀＜GO＞・船戸与一＜虹の谷の5月＞ 第124回芥川賞、青来有一＜聖水＞・堀江 敏幸＜熊の敷石＞、第124回直木賞、重松 清＜ピタミニア＞山本文緒＜プラナリア＞	＜こころ＞の時代の到来 小学館の電子ブック版＜日本大百科全 書＞、平凡社＜世界大百科事典＞など百 科事典や辞書の＜電子出版＞本格化 ＜文化＞ブーム(三内九郎田道跡発掘) 文部省、＜アーツ・プログラム21＞助成団体発表 全国初の電子図書館(奈良先端科学技術 大学院大学) 宮沢賢治生誕100年、出版、イベント レトロな時代のハイテク感覚 春山茂雄＜脳内革命＞野口悠紀雄＜超絶 強法＞近藤誠＜患者よ、がんばろうな＞ 第114回直木賞、又吉忠告＜豚の頬い、 第114回芥川賞、小池真理子＜恋＞・藤原 伊織＜テロリスト＞のバラスル 第115回芥川賞、川上弘美＜蛇を踏む＞、 第115回直木賞、乃南アサ＜凍える牙＞	テレビ東京＜ボケットモンスター＞視聴 中の小・中学生が失神、騒音 アダルト・チルドレンの注目が 渡辺淳一＜失業圏＞300万部ベストセ ラー 村上春樹＜アンダーグラウンド＞ ネオ・オタクな若者たちの誕生 アニメ＜ものけぢ＞史上初売上 映画＜新世紀エヴァンゲリオン劇場版＞ シュベール生誕200年記念企画 年30日以上不登校小中学生10万人超える マルチメディア百科事典刊行相次ぐ 仁成＜海峡の光＞、第116回直木賞、坂東 眞砂子＜山嶽＞ 第117回芥川賞、目取真俊＜水滴＞第117 回直木賞、篠田節子＜女たちのジハー ド＞・浅田次郎＜鉄道員ぼっぼや＞	経済成長率実質3.2%、名目0.8% 完全失業率5.1%、有効求人倍率0.69倍 合計特殊出生率1.32に(人口減少社会) ネット仲間が集団自殺 牛のBSE感染広がる 新型肺炎SARSで海外旅行者減少 ホームレス全国で2万5千人 過労死が過去最多に(160件) ＜ユビキタス＞社会(ケータイ社会) ＜歴史＞を見据えた文学作品 ＜バカの壁＞がブームに(247万部) 村上隆、日本のオタク文化をアートの SMAP＜世界に一つだけに花＞ヒット ＜ポウリング・フォ・コロコロン＞ ＜WATARIDORI＞ドキュメンタリーが観作 にきわまった＜歌舞伎四百年＞ イラク戦争・北朝鮮問題が論壇で沸騰 第129回芥川賞、吉村高志＜ハリガネム シ＞、第129回直木賞、石田衣良 ＜4TEEN＞・村山由佳＜星々の舟＞ 第130回芥川賞、金原ひとみ＜蛇にピア ス＞・綿矢りさ＜蹴りたい背中＞、130 回直木賞、京極夏彦＜後巷説百物語＞・ 江国香織＜号泣する準備はできていた＞